

2021年3月20日 第4回オープンミーティング報告

2021年3月20日、オンラインで運営委員会をした後、公開のオンライン・ミーティングを開催しました。

テーマ：「教科とP4C」

報告者 城野 知佐（大阪教育大附属平野小学校教員）

司会 北浦 貴之（山梨県小学校教員）

時間 午後3時～午後4時30分

参加者は基調報告者と司会以外は、運営委員4名、一般の参加10名、の計16名

概要

事前コメント

- ・ 学校における子ども哲学の実践に関心があります。「深く考える」というときの「深さ」について、子ども哲学はどのように考えているのか興味があります。
- ・ 学校のICT支援を行っていますが、もともとキャリア教育に興味があり、紆余曲折あってここにたどり着きました。4月からのp4c開きの方法について知りたいです。
- ・ p4cを体感してみたいと思い応募しました。

教科とP4C

報告者の自己紹介

芸術鑑賞＝面白いことや驚きを感じること

子どもが予想もしないことをしてくれるのが本当に面白い

このこととP4Cを結びつける

子どもたちにできるだけ楽しく過ごしてもらいたい

P4Cの捉え方

子どもは日常を楽しむ天才

大人はそれを無駄な時間だと思ってせかす。教師がそれを閉ざさないようにする

日常を楽しむ土台がP4C

どう教科に生かしていくのか

「ちがうで」から「かもしれないへ」へ

認め合う気持ち／友だちも自分も許せる気持ちを強化の授業で育む

図画工作科、学年は2年生

P4Cと似ている。何をやってもすごいこと、驚くこと、認めるという安全性（思っていたこととは違う）題材の設定。ふしぎを受け入れるようになっていく
特に輪を作ってやっているわけではない。エッセンスを生かす

「この作品 こんな題名かもしれない」

作品を提示して、参加者に題名を考えてもらう。

出てきた題名は、

透けている／昼を盗む男／宇宙

など

実際の授業では

友だちが自分と思っている題を出してくる

実際の子どもたちの題を例示

子どもたちが認め合う心を育む

自分自身でも許せる。普段の自分のあり方だったら我慢できないことも。やり切った感がある。前向きの姿勢が育つ

国語科

教材「かさこじぞう」

読んで、「はてな」を出す。出た問いを、順番を考慮して、議論をする、
これをするると指導要領の内容を網羅してくれることになる。

道徳科

教材「なまけにんじゃ」

未来そうぞう科（附属平野小学校の開発授業）

未来旅行：コロナだから、校内探求ができて面白い。

どうしたら遠足に行ける？自分たちでアイデアを出しながら、校内を探求する

おわりに

コミュニティボールの可能性

隣のクラスでボールを持っていく。初めてボールを使った後の感想。ボールを持っている人が話すので分かりやすい。普段は「誰それさん」と言われても聞こえない時がある。

議論

Q: 子どもたちの体がほぐれていった、考え方も変わったということだが、具体例はあるか。

A: 絵が苦手だから、物事が自分の中で形に変わると語った子が、それが本心なのかいいわけなのかが分からなかった。しかし、次第に絵が描けるようになっていった。

発表するのが苦手な子が、発表できるようになった。環境の変化によっても考えられる。

Q:「かもしれない」が面白かった。問いを拾って国語をすると、收拾がつかなくなるのでは。

A:そういうこともあるだろうなとは思いますが、それは授業の目当てがはっきりしていないからではないか。その日の目当てがぶれていないときは、問題は少ない。他のクラスでの実践的なかたちでも報告があった。

Q: 目当てと子どもの自由とが相反するところがあるが、その折り合いはどうするか。

A: 学校文化、規律などのせいでほぐれていない面がある。ほぐれていく感覚ができていくと、子どもの方から場を維持するという態度が出てくる。このような場を育てるようにしていくことが対話的学習には必要。何を目当てにするかという質もある。知識かプロセスか、そういうことを考えていくことも大事。

算数とかでは、問題を受けて、目当てはどうすると子どもに考えさせる。目当ての立て方と自由な発想とが乖離しない場合がある。

参加者のコメント：柔軟さが自分になかったという反省をした

A: 大教大附属では学校全体でしているわけではないが、総合学習としての未来そうぞう科があり、そのテーマに「語る」ということが研究の焦点があって、P4Cを受容しやすい土壌はある。

Q: 教科をして P4C の感じ方が変わったか。

A: P4C をするという言葉の使い方がよく分からなくなったというような面が正直ある。

子ども一人というのではなく、回り、環境が変わっていくことで、子どもが受け入れられていく

工夫

「かもしれない」でもいいんだよ、と子どもに語り掛けることがある。

子どもが語りやすくするための語り方

フリートーク

算数の計算では、タブレットを使ってすぐに答えを出したりして、他の教科でも消極的だった子が、P4Cの授業では、「ただ自分たちの意見を言うだけだったのに、今日は頭を使った」といって、非常に積極的な発言をする。このときの、「頭を使う」というのはどういうことなのだろうか、自分は何を教えているのだろうか、考えさせられる。

頭を使うということは、楽しかったなとか、場を共有したという感覚をもつ。子どもの言葉を受けとめられるということが大切かなと思った。

何で勉強するのと聞かれたら、楽しいから、教師自身が楽しむ姿を見せる

教師はファシリテーションしない方がいいという考えもある

教師が楽しいと思う人はあまりファシリテーションしないと思う。例えば、話さなかった子が話すようになった時の驚き、それを楽しむという感覚を持つことが大きな要素
自分の都合のよいような方向を目指せば、子どもはそれを敏感に感じ取ってしまう。
物事を深めるということになると、振り返るとき、話し合いの深まりということ振り返るときに、話し合いの進め方を子ども自身が気づいて行くようにしていくということ、これはファシリテーションではないか。

以上
文責 榊形